

「治平組展2022」が開催中の天王洲セントラルタワーアートホール



鍛金陶芸師と弟子38作品

東京・品川の天王洲セントラルタワーアートホールで、多彩な工芸作品を紹介する「治平組展2022」が開かれている。今こそ



東日本大震災の被災者に思いを寄せて作られた鈴木治平さんの作品を前に、展覧会について語り合う小島泰明さん(右)と扇原康成さん

アートギャラリーの集積地に育った天王洲だが、原点の一つが1999年に始まった同ホールでの展示だった。今回で計231回を数え、2000回超えを記念して企画された本展では、99年の第1回展「治平組展」に集った作家たちが再集結。工芸の魅力とアートの息づく街づくりの意義を発信している。

参加しているのは、東京芸術大工芸科の昭和55年度生で、著名な鍛金家で同大教授だった鈴木治平さんの担任指導を受けた作家たちだ。今回は有志20人に鈴木さんも加わり、鍛金や陶芸など多様な分野の38点を出

品している。

小島泰明さんの立体作品は、鉄が鉛細工のように躍動し、水しぶきや菊を表現する。「粗野で冷たいイメージがある鉄で、柔らかくしなやかなものを作りたい。陰と陽の全く逆の世界の隙間に芸術が宿ると思えうから」と話す。渡辺林太郎さんの円形作品は、金属を打ち鳴らして澄み切った音を響かす。部品を一から作ったオートバイ(柿崎隆之さん制作)なども目を惹きつける。

アートの街 発信

愛らしい猫の造形作品を創作した扇原康成さんは「初回の展示に比べて皆の作品の質が格段に上がり、感慨深い。何が飛び出すか分からない多様さが本展の特色。工芸は手で作る究極の世界で、その面白みを体感していただけたら」と話す。個性的な作家を育てた師・鈴木さんの影響力について、小島さんは「我々が自由な川だとすると、普通の教育は護岸整備して用水路を形作るようなものだが、先生の教えは川の真ん中に石を置き、どっちに流れようか、我々に考えさせるようなものだった」と振り返る。

東京・天王洲のホールで

クイズや過去のシリーズは読売新聞オンラインに

ことわざ 大百科
vol.187

ならぬ堪忍 するが堪忍

「堪忍はがまんすること。もうこれ以上はがまんできないうとうところを、じつと耐えるのが本当のがまんだということだよ。ソーナンスには、ひとつだけがまんできないことがあるんだ。」

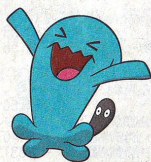
ソーナンス

がまんポケモン。高さ1.3m、重さ28.5kg。ひたすらがまんするポケモンだが、シッポを攻撃されることだけはがまんできない。

月曜から土曜までの朝刊に掲載中!

同タワーは中川特殊鋼のビルで、同社は竣工後、発表の場が限られた工芸アートを志す若手らに、1階の同ホールを会場として提供してきた。東京芸大だけでなく、他の美大の制作展も継続的に開かれている。天井まで5・5メートルあり、

学生が展示空間を意識した制作を学ぶ絶好の機会にもなっている。中川浩司副社長は「ビジネスの都市空間に工芸アートが溶け込み、街に潤いを与え続けられればうれしい」と話している。15日まで(土日休館)。無料。(文化部 岩城 扱)



©Pokémon/Nintendo/CR/GF